

## 歳月の鉛

四方田 犬彦著

批評家・四方田犬彦にも、疾走の前には、繭の内に微睡み、羽化を待つ隠遁の季節があった。『歳月の鉛』は、学園紛争の渦中を描く『ハイスクール1968』の続編だが、時代は一転、不機嫌な服喪に閉ざされる。72年の連合赤軍浅間山荘事件から、79年の著者の韓国出発まで。陰惨な学内「内ゲバ」殺人による荒廃の傍ら、沈鬱と停滞に刻まれた不活性的の年月。

だがそれは、まだ大学教師との遭遇が、人生行路に事件を齎す時代だった。すでに『先生と私』に詳述された由良君美との交渉のほかに、東大駒場では丸山圭三郎、阿部良雄、本郷では柳川啓一、益田勝美、小泉文夫など。師表の人と学問とが、若い学生に約束する自己陶冶の様を、著者の26冊のノートは、克明に証言する。

80年代に批評界の教祖や龍児となる人々も、次々に登場する。だが本書には著者が袂を分った過去との、和解と修復の作業がある。



(工作舎・2400円)

▼よもた・いぬひこ 53年生まれ。明治学院大教授。幅広い分野で批評活動を展開。

## 70年代、羽化を待つ季節の記録

新帰朝者・蓮實重彦に50年代ハリウッド映画への執着を読み、松浦寿輝に才能ゆえの不幸を見据える分析には、人生への、愛憎を超えた洞察が重い。宗教学教室や幻の同人誌『シネマグラ』に屯する群像。山中貞雄『人情紙風船』と伊丹万作『赤西蠣太』上映に奔走する平野共余子への瞠目と、天折した彌永徒史子への愛惜。あらまほしき知的女性の姿が点滅する。

当時20歳代前半の著者の手控えには、青年の煩悶が哲学的内省と表裏一体だった様も透視される。エリアス・カネットイの『マラケシュの声』に『雨月物語』の青頭巾を連想し、衣笠貞之助『狂った一頁』をフォークナーの『響きと怒り』の冒頭に結びつけ、ドノンの『夜のみだらな鳥』に山上たつひことの種類を見る特異な鋭敏さ。ここには、越境する知性の原石が既にまざまざと露頭している。

さらに「安全地帯」から傍観者然と振舞う輩への生理的嫌悪。極私的執念に生きた小川徹や、著者を小川に引き合わせた「ゲルマン伯父」さん。彼らへの共感は回復され、象徴に変容し、伝説と化する。79年夏、駒場第八本館比較文学比較文化研究室の院生溜りには、韓国へ発った著者のロッカーが空っぽの繭となって残されていた。

国際日本文化研究センター教授  
稲賀 繁美